

ポラリスを仰ぐ北の大地から

ノイヘレン時代の発熱

江別医師会 会長 笹浪 哲雄

この度、由緒ある江別医師会の第13代目会長になりました。平成6年（1994年）、江別市野幌町に内科無床診療所を開業してから26年、四半世紀となります。市民の皆さんに支えられて今までやってることができました。お世話になった恩返しの思いで、江別市の医療に取り組んでまいります。

一人体制のクリニックでは時間的制約があつて、さまざまな会合のすべてには出席できません。野呂前会長時代の「みんなで協力して支え合つてやっていこう」という方針がありますので、『チーム江別』の思いで理事の皆さんと協力して進んでまいります。

40年前、医者になった年の12月、医局と詰所の合同忘年会を欠席しました。理由は発熱でした。マウスを使用した実験を始めた時で、教授から「韓国出血熱」ではないのかと心配されました。2、3日で治つたので、かぜ症候群でした。翌年の冬もまた発熱しました。診療を通してうつたと思いますが、年季が入った今では、インフルエンザもいただきません。しかしながら、COVID-19は違います。これからは防護体制が整わなければ、検査はありえません。皆さんは今年インフルエンザの簡易検査をされますか？

「韓国出血熱」の病原体はオルソハンタウイルス（RNA）。ヒトへの感染源は、ウイルスを保有する野生げっ歯類の出す排泄物で汚染された埃であり、吸入して感染します。ネズミの尿やフンに汚染された密閉屋内空間はリスクが高くなります。1983年、「腎症候性出血熱」に名称は統一されました。日本においては、この20年以上患者発生はありません。同じ年には「HIV」がエイズ患者から分離されました。その後新しいウイルスの発見がなされています。

歴史を振り返ると、どんなことにも乗り越えてきた智慧があります。また、乗り越えてみせるといふ、勇気や希望があります。私たちの生命にはもともと大いなる力が備わっているのです。そう信じて「コロナテスト」に挑戦していきましょう。

謎のイワナ

千歳医師会 会長 坂本 孝志

小さいころから釣りが好きで学生時代は釣り部に所属していた。5年生の夏休みに釣友と道南の溪で体幹に赤い斑点を持つイワナを釣った記憶がある。しかし北海道に生息するイワナには、体幹に白い斑点しかないことになっている。同行していた釣友はオショロコマだと断言した。たしかにオショロコマには赤い斑点があるが、そのとき釣れた魚は明らかにオショロコマとは異なっていた。そもそもオショロコマは毎年大雪山や知床の川でさんざん釣っていたので見間違はずがない。また、北海道におけるオショロコマの分布南限は島牧郡千走川とされており、件のイワナが釣れた川ははるかに南にあった。卒業して医師になってからも多忙な中溪流釣りは細々と続けていたが、赤い斑点のイワナのことはまったく忘れてしまっていた。

時は流れてあれから三十数年たった今春、たまたま購入したイワナ草子という本に北海道で赤い斑点のあるイワナを釣った話があった。川の名は檜山郡上ノ国町にある石崎川の支流となっており、その時の川とは違っていた。石崎川は現在保護水面に指定されていて釣りはできない。話を読んで無性に赤い斑点のイワナが釣れた川にまた行きたくなった。しかし若いころのように源流部まで沢登りをする気力も体力も今はない。そこで近くにある川で林道伝いに上流部にアクセスできる川を選んで行ってみた。幸運なことに赤ではないがオレンジ色の斑点を持つイワナを数匹釣ることができた。見た目は本州に分布するニッコウイワナとそっくりだが北海道にニッコウイワナはいないはずである。まさに謎のイワナとしか言いようがなかった。ニッコウイワナは関東・東北地方の山岳部に分布している。道南においても最上流部にはニッコウイワナ型が生息し、その下流にイワナが住む河川が意外に多くあるのかもしれない。

